時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

琅來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

【Ｎコード】
Ｎ７９８６Ｘ

【作者名】
琅來

【あらすじ】
※こちらは分割版となります。
長編版　↓　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０６９７ｐ／

身分が物を言う世界――そこは、今から千年後の、宇宙進出をも果たした、遠い遠い未来だった。そこには、二人の少女がいた。彼女達は身分が違いながらも、仲のよい親友だった。けれど、中学一年生の夏休みから、二人は運命の渦に翻弄されることになる。そうし

て知った、衝撃の事実とは――。

序章「総ての始まり」（前書き）

この話は基本的に友情物ですが、話の都合上恋愛も入ってきます。
また、途中で近親相姦も入ってくるので、苦手な方はご注意下さい。

序章「総ての始まり」

「嗚呼。この子は……この子はあの時に、産まれて来てしまったのですわね。せめて……せめて、もう少し遅ければ……」
「そのことは、言うな。今は、産まれたてのこの子供に、名を付けなけなければな」
「それは、考えがあります」
「どのような名だ？」
「はい。それは、今この国にはない、富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること、樹木を視てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実った果実を、単なる食糧として感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育ってきたその生命力と大地の恵みに感謝する心を願って、――と名付けましょう。この子が――になった時の繁栄を願い」
「ああ。それはいい。美しい名だ」
「ところで……」
そう言うと、美しいその女性は、一息置いてから、隣の男性に話しかけた。
「この子は、やはり、あちらへ……？」
「その時は、お前の名をつけよう……きっと」
「あの……この子に、弟か妹が産まれたら……そして、信頼でき、決して裏切らないような子供がいた時は、その時にはこの子が――と言って、いいですわよね？　いくらあんな人でも、まだそのような酷いことをやろうとは思わないでしょうから」
「ああ。我らはいつまでもいられるとは、限らんのだからな……」
この二人の間に、なんとも淋しそうな空気が流れた……。

「まあ、なんて可愛い子なんでしょう。ぴったりの名前は何かしら？」
「そうだなぁ。そうだ。古い言葉で、『鶴は千年　亀は万年』と言うではないか。だから、鶴はどうだ？」
「そんな名前は嫌よ。なんて言ったって、この――に相応しい名でないと、絶対にからかわれるはずだわ。それに、古風すぎるわよ。絶対に、断固として拒否します」
「しかし、縁起がいいと言うと……」
「じゃあ、この――を取って、私が好きな音で響きのいい、『――』という音をつけましょう。そして、この『――』の漢字は、このように」
　女性はそう言うと、手元にあったパネルに一つの漢字を書いた。
「そう、そしてこの二つをくっ付けて、――にしましょう！　貴方。反対、しないでしょうね？」
「も、勿論だ！　反対する訳がない！　……それに、響きのいい名だしな」
「ええ。本当に……本当に、可愛い子。大きくなった時、どんな子でもいいわ。この子に合う友達が、沢山できるといいわね……」
「ああ……そうだな……」
　先程の二人とは実に対称的に、何とも暖かく、優しい想いが満ち溢れた……。

第一章「日記帳」―1

ここは、今からおよそ千と数百年後の、西暦三二四八年、全宇宙共通暦一三二一年の世界。

西暦二七〇〇年頃、地球は他の遠く離れた星から発見されたことを告げられ、しかも文明がこちらの方が大分遅れていることに気付かされ、大混乱に陥った。

だが、ここではもうそんなことは遠く昔の過去の出来事となり、地球は地球連邦となり、日本国はただの日本州となって、みんなが全宇宙共通語を話す時代となった。

ここはそんな日本州の、とある街にある公園だ。

季節は夏真っ盛りで、夏休みである。

「由梨亜(ゆりあ)〜！　お待たせっ！」

「あら、遅かったじゃないの、千紗(ちさ)。呼び出したのはそっちのくせに」

声を掛けられた少女――由梨亜は、背中の中程まで届く、柔らかく波打った茶色の髪を一つにまとめている、緑がかった黒の瞳の美少女で、声を掛けた少女――千紗は、肩甲骨辺りまでの、長くもなく短くもない長さで、墨を流したかのような、柔らかく光る真っ直ぐな黒髪を一つにまとめ、瞳の色は髪よりは茶色い色をしている。

それだけならいいのだが、今の地球連邦の常識で考えると、この光景は可笑しく見える。

何故なら、由梨亜はいかにもお嬢様に見えるのに対し、千紗は普通の少女なのだ。

もしもここに常識のある、普通の人がいたら、首を捻ったはずである。

何故ならこの地球連邦は身分社会で、大きな会社を経営し、しかも慈善団体などに寄付するお金を惜しまない、何十代も続く家を貴族と呼び、いくら稼いでも、寄付するお金を惜しむ家や、まだ成っ

て間もない成り上りは富豪と呼ばれ、それ以外の人は庶民と呼ばれる。
　また、商売をしていても、老舗と呼ばれるような昔から経営しているお店でも、支店がなかったり、少なかったり、手を付けている仕事の幅が狭かったりすると、いくらお金を稼いでも、寄付しても、ぎりぎり富豪には認められるかもしれないが、貴族として認められない。
　そして、この由梨亜は正真正銘大貴族のお嬢様で、千紗は正真正銘の、親戚のどこを捜しても富豪や貴族がいない、立派と言ってもいいほど立派な庶民なのだ。
　しかし、この二人は敬語を使わず、しかも相手の名前すら呼び捨てで普通に通している。
　なので、珍しくはあるが、二人は身分を越えて友達になったと考えるのが妥当である。
「あのね、由梨亜。さっき先輩から連絡あって、あたし達も百不思議に挑戦しろって！」
　そう……七不思議ではない。
　百不思議である。
　この二人の通っている学校はかなりの曰く付きで、そう言った怪談物が数限りなくあるのだった。
「本当！　千紗？」
「勿論！　それで内容は、夕方頃に学校の使われてない備品室に行くことだって。それで、怪談によれば、そこには、昔自殺した女の子が遺書にって遺したノートが、逢魔ヶ時になると現れるんだって。それを見つけるっていうのが、あたし達が挑戦することだってさ」
　この二人の会話で大体分かったかも知れないが、二人の所属している部活は、『心霊研究部』という部活である。
　だが、その名前の響きとは違い、普段のこの部活は、科学的な根拠を元に心霊現象を解明していくという、至って科学的な部活である。

この二人は、その部活の一年生だ。
だが、年に一度――三年生が引退してしばらく経った夏休みに、何故か一年生が、この学校の百不思議の中から一つを挑戦するという慣習がある。
そしてこの二人も、その順番が回ってきたということだ。
「それで、時間は？」
「今週の水曜日、夜の六時だって。先生もいいって言ってたよ」
「ってことは、先生からも許可を得ているんだ」
「当たり前でしょ？　あたしはともかく、先輩がそんな手抜かりするはずないよ」
……自分で分かって言っている所が、特に問題な発言であった。
「まあ、そりゃそうよね……それで、場所は？」
「旧校舎三階の北端の、さっきも言ったと思うけど、備品室。だけど、今は使われてないから、埃に気を付けないとね」
「ええ。ねぇ千紗、今日暇？　時間あるのなら、うちで遊ばない？」
「うん、いいよ！」
この二人の名前は、本条（ほんじょう）由梨亜と彩音（さいいん）千紗。
二人は、とても仲の良い親友だ。
しかし、二人はこの後に起こることを知らなかった。
知っていれば、断るに違いなかった、恐ろしいことを。

丁度、明日初めての任務に挑戦するという、火曜日のことだった。
「千紗」
「何？　由梨亜？　明日の確認？」
「違うの。あのね、千紗。明日……行かない方がいいよ」
「どうしてっ！」
「千紗、煩い。ちょっと黙って」
由梨亜は大声を出した千紗に注意をしてから言った。

「あのね、私の曾お祖母様は、この学校に通っていらしたらしいの。曾お祖母様は、本家から外れてたから。それで、私が明日、これに挑戦するっていうことを聞いて、注意して下さったの。曾お祖母様はこの、私達が試そうとしているこの怪談で、危険な目に会ったんだって。だから、この怪談は、飛ばされたんだって」
「何それ。由梨亜。それ、ほんとに信じてんの？」
「えっ？」
由梨亜は、きょとんとした表情で言った。
「あのさ、それって、どの曾お祖母さん？」
「……え～っと、お母様の、お母様の、お母様に当たる曾お祖母様よ」
由梨亜は、指を折って数えた。
「……その人ってさ、前、あたしが由梨亜の家に遊びに行った時に、私立の超頭がいいので有名な幼稚園から大学までの一貫校出身で、その中でも常にトップクラスだったって、あたしにすっごい自慢してた人だよね？」
「……」
由梨亜は、言葉が出なかった。
「これはあたしの想像だけどさ……多分、由梨亜の曾お祖母さん、由梨亜を心配して言っただけで、何にも根拠はないと思うよ……？」
千紗が恐る恐る言った言葉に、由梨亜は頭を抱えてしまった。
全く否定できないだけに、とても痛い。
「うん……多分、そうかも……」
「じゃ、明日、予定通りにね？」
「……うん。ごめん……千紗」
「いいって。ほら、行こ？」
「うん……」
由梨亜は半ば脱力したまま、千紗と共に歩いて行った。

そして、その夜が来た。
「千紗〜！」
「遅い！　今まで何やってたの！？」
「えっ……。だって千紗。今、五時四十分だよ？　五時五十分集合って言ってなかったっけ？」
「え……アハッ」
「もぅ。ボケないでよ」
由梨亜が頬を膨らませて言った言葉に、千紗は笑いながら答えた。
「じゃあ行こっか」
「うん！」

「うっわ〜！　こんなに薄暗くって人気もない学校って怖いね〜由梨亜。何だか気味悪いし……。ねっ、由梨亜。あたしはこんなことするの初めてだけど。由梨亜はある？　あっ、そうだ、そういえば、この中にあるノートって……」
「千紗！」
「はい！」
千紗は、思わず背筋を伸ばして答えてしまった。
……ちなみにその叱責は、正直言って今まで聞いたどの先生や親からの叱責よりも迫力があり、逆らいがたい物であった。
「煩い！　ちょっとは静かにしたらっ？　ほんと言うと、私、怖いんだから……ちょっとだけだけどね」
「ふ〜ん……ちょっと、意外かも……」
「いいから、さっさと行くわよ！」
「は〜い……」
二人は、薄暗い廊下を歩いて行った……。

「由梨亜、着いたよ」
「ええ」
「それじゃあ、行くよ！」
ガラッ、という音を立てて千紗と由梨亜が戸を開けると、使われていない机の上に、何かが一瞬ピカッと光った。
光は一瞬にして消えたが、千紗は構わずにその机へと歩き出した。
「ちょ……待ってよ！　千紗！」
呆気に取られていた由梨亜が、我に返って千紗を追いかけた。
千紗は追って来た由梨亜を従え、その光った場所へ行ったが、光った机の上に置いてあった物を見るなり、息を呑んだ。
「……ほんとに、ノートがあった……」
「千紗……でも……でも、さ。これ……もしかしたら、先輩の悪戯かもよ……？」
「うん……でも、悪戯にしてはちょっと悪質じゃない？」
「うん……まあ、悪質って言えば、悪質だろうけど……ちょっとした、ドッキリかもね」
……既に、二人の中では『先輩の悪戯』と確定されてしまっている。
「うん……じゃあさ、これ、先輩に報告した方がいいよね？」
千紗は携帯端末という、地球連邦内ならどこでも繋がり、希望すれば立体映像にできる優れ物であり、大抵はみんな持っている物を取り出して言った。
「じゃ、あたしが柑奈（かんな）先輩に電話掛けるね？」
「ええ。私って、こういうの持ってないもんねぇ……」
由梨亜の溜息じみた言葉に、千紗はにやっと笑った。
「こういう時、お嬢様って不便だねぇ」
「もうっ！　いいから、さっさと先輩に連絡取ったら？」
「はいはい」

千紗は、すぐに柑奈に電話を掛けた。

その時、柑奈は苛々と携帯端末を手に取ったり置いたりと繰り返していた。

と、その時、いきなりコール音が鳴り、ぱっと携帯端末を手に取った。

「もしもし？」

『もしもし、柑奈先輩ですか？　あたしです。千紗です』

柑奈は、それまでの苛々とした様子を消し、手をぽんと打った。

「千紗？　……ああ、そういえば今日だったね。……それで、どうだった？　何か、見付かった？」

柑奈の悪戯っぽい言葉に、千紗が映像に映るように、一冊のノートを掲げた。

『はい。こんなノートが置いてありました』

「へぇ。こんなのがねぇ。中身、見てみた？」

『あ、いえ……まだです』

「じゃあ、見てみなさいよ」

『はい……』

柑奈は、しきりと千紗を急かした。

そのノートをパラパラと捲っていた千紗は、少し怪訝そうな顔になった。

「ん？　どうした？　千紗」

『あの……これ、普通のノートじゃないんですけど……』

「どんななの？」

『え～っと、何て言うか……』

『日記帳に見えますね……』

横から、由梨亜が顔を出して言った。

「ふ～ん……じゃ、しばらく二人でそれやっといて」

『はっ？』
『はいっ？』
二人は、揃って驚いたような顔になった。
『え～っと……これを、ですか？』
「うん。そう。二人で交互にやっといて？　一人だったらずっと一人でやればいいだろうけど、二人だからね。だったら、二人で交互にやったらいいんじゃないの？　あ、でも、後で見せて貰うことになるかも知れないから、見せられない内容は書かないこと。いい？」
『はい、先輩』
「それじゃあ、明日ね」
『はい。さようなら、先輩』
千紗と由梨亜はそう返事をすると、端末を切った。
柑奈はしばらく端末を手に考え込んでいたが、一つの番号を押した。
短いコール音の後に、柑奈と歳の変わらない少女が出る。
『もしもし……柑奈？　もしかして、千紗と由梨亜から連絡来たの？』
「うん。見事に引っ掛かってくれたわよぉ～」
柑奈は、にっこりと微笑んで言った。
そう、これは毎年恒例の肝試し――というか、悪戯なのである。
『じゃあ、どうする？　千紗と由梨亜で一年は全員終わったけど……ネタばらし、いつやる？』
「う～ん……じゃあ、九月入ってからにしよ？　あんま早過ぎても、興醒めでしょ」
『じゃあ、また明日ね、部長さん』
「はいはい、明日絶対遅れないでよ？　副部長さん」
二人はそう冗談のような口調で言うと、それぞれ端末を切った。

「じゃあ、先輩はああ言ってたけど、順番どうする？」
二人は学校から帰りながら、会話を交わしていた。
「ん～、じゃ、由梨亜からでいいよ」
「ええ。分かったわ。じゃあ鈴南（すずな）が早く帰ってって言ってたから、急ぐわね」
鈴南とは、由梨亜付きの召し使いである。
けれど、その鈴南にしても、実は貴族階級のお嬢様であり、千紗よりも身分が高い。
そんな人間を複数人使用人として抱えている由梨亜は、それこそ正真正銘のお嬢様なのであった。
「うん。じゃ～ね」
「じゃ～ね～！」
「あの由梨亜は、どんなことを書くのかなぁ……」
由梨亜が去っていくと千紗は独り言を漏らし、そして角を曲がり、自宅へと帰って行った。

由梨亜は、屋敷の扉を潜ると、声を掛けた。
「ただ今戻りました」
すると、すぐに鈴南が出て来る。
どうやら、由梨亜が帰るだろう時間を待っていたようだ。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
鈴南が頭を下げると、その後ろから、由梨亜の母が顔を覗かせた。
「あら、お帰りなさい。由梨亜」
「ただいま。お母様、鈴南」
「それでは奥方様、お嬢様。こちらへ。夕ご飯のお支度が整っております」
「ええ、鈴南」

第一章「日記帳」―2

「お帰りなさい！　お父様！」
その日の翌日、本条家の広い屋敷に、由梨亜の元気な声が響いた。
「ただいま、由梨亜。お前の誕生日の前までに、シャリート国から帰れて良かったよ」
由梨亜の誕生日は、八月十六日。
そして、何の偶然か、千紗も同じ誕生日だった。
今は、八月十四日だ。
「ところで由梨亜、明日は部活あるかい？」
「いいえ。夏休みは木曜の午前中だけなの。明日は金曜だから空いているわ」
「それでは明日、十八日にするお前の初めてのパーティーの為に、ドレスを買って来ようか？」
「ええ。それでは私、着替えて来ます」
由梨亜は部活から帰って間もなく父親――本条耀（よう）太を迎えたので、制服のままだった。
由梨亜は階段を駆け上がって部屋に駆け込むと、溜息を一つついた。
「ふぅ～」
（良かったぁ。怪しまれなかった。お父様もお母様も鈴南も頭固いから、もしも見られたら大変なことになっちゃうわ。早速書こう！）
由梨亜はしばらく日記に何かを書いていたが、五分後、書き終えたのかその手を止めた。
「できた～！」
（これ、明日……は無理だから、明後日渡そう！　あっそうだ！千紗に、その時一緒に招待状渡そう！　私のパーティーに。ついでに、部活の人全員に、都合がつくなら招待状送ろうかな。ああ、楽しみっ！）

由梨亜が楽しげに心を弾ませていると、コンコン、という音がして、外から鈴南の声がした。
「お嬢様、お食事の時間にございます」
「ええ。今行くわ」

その翌日、由梨亜は耀太や母親の本条瑠璃（るり）、他に荷物を運ぶ為と、運転の為と、車の盗難防止の為に車に残ってもらう為に連れてきた召し使い達と共に、本条紳士淑女高級店という、本条家が開いている店の本店に、わざわざ四十分も掛けて行った。
交通網が発達している今、四十分も掛けた移動というのは大事である。
本来なら屋敷に運び込んでもいいのだが、あまりにも品揃えが豊富だった為、それもできず、またいい物が揃っているのはやはり本店なので、時間を掛けることにしたのだった。
店に入ると、由梨亜は少し甘えるようにして言った。
会えない時は、一ヶ月以上も会えない相手でもあるので、自然とそうなってくるのだ。
「お父様。私、ドレスとか靴とか、青や白で統一したいわ」
「ああ。いいとも」
「あっ、このドレス可愛い！　綺麗な色～。この色も綺麗ね～。あぁ、迷ってしまうわ」
「由梨亜。どんなに迷ってもいいから、お前の気に入る物を買いなさい」
「はい、お父様」

結局由梨亜が買ったのは、裾が南国の海の海底が一段と深くなっ

た所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーションの長袖で膝下丈の、今時珍しい――つまり、かなり高価な――本物の絹でできたドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメルの靴、群青色の毛糸のポンポンのような物を真っ白なレースでくるんだ髪留めだった。
「由梨亜。これでいいのか？　他に買わなくて」
「ええ。だって、これと言えるアクセサリーが見つからなかったんですもの」
由梨亜は少し唇を尖らせると、すぐに笑顔になり、言った。
「でも、ドレスとか靴とか、気に入った物があって良かったわ」
「そうだな」
その時、由梨亜は確かに何かの視線を感じたが、振り返ると、何もなかった。
（まただわ。また、何もない……この前も、その前も、そして今も、確かに誰かからの視線を感じたのに……）
「どうした？　由梨亜」
「いいえ。何でもないわ」
「さぁ、お乗り下さいませ。旦那様、奥様、お嬢様」

チャイムが鳴り、千紗がドアを開けると、そこには珍しいことに由梨亜の姿があった。
「由梨亜！　来てくれたんだぁ～。上がって」
「お邪魔します」
「一々言わなくても別にいいって！　ほらほら」
由梨亜は千紗に急き立てられ、玄関を上がった。
「はい」
コトン、と千紗は、二人の前にお菓子の入った器とジュースを置いて、話しかけた。

「それで、どうしたの？　由梨亜がうちに来るのって、珍しいよね？　って言うか、一年振りぐらいじゃない」
千紗は由梨亜に、単刀直入に訊いた。
「あ、うん。そうだね。はい、日記帳。うちだと、鈴南達の目が厳しくて渡せないの」
由梨亜はそう肩を竦めて言うと、千紗に手渡した。
「ありがと、由梨亜。じゃ、あたしが書き終わった後も、由梨亜に来て貰うか部活の時の方がいいね」
「ええ、そうね。あと、私の初めてやる誕生日パーティーの招待状。他にも、都合つく部員の人も招待するつもりよ」
「へぇ～。あっそうだ！　由梨亜、あたし、由梨亜に今プレゼント作っている途中なんだ。楽しみに待っててよね？」
「へ～。何作ってるの？」
「ブレスレットと、あとネックレス！」
「ふ～ん。何色？」
「白とか、水色とか、青とかを組み合わせているの」
「そうなんだ。偶然だね。私も、千紗に薄いピンクや赤紫とかの、ブレスレットとネックレスを作っている最中なの。ちょっとびっくりだわ」
「じゃあ、交換するみたいだね！」
「そうだねぇ～」
由梨亜は、日記帳の存在を知られずに千紗に渡せたことをとても喜んでいた。
そして、次に回って来た時も、上手く出し抜けられるようにと祈った。

「それは……それは、どういうことだ。由梨亜！」
耀太の、怒りが燃え上がり、もう手が付けられない状況に陥った

罵声が、屋敷を揺るがすが如く響いた。
だが、由梨亜はそれに全く動じず、困惑したかのように、たった今言ったばかりのことを言った。
「何って……ただ、友達や先輩方を、私の誕生日パーティーに誘いたいって、言っただけじゃないの。これの、どこがいけないの？」
由梨亜が至って不思議そうに言った為、耀太も怒りを少し抑え、こう言った。
「いけないも何も、大量の庶民を屋敷に招待するなぞ、前代未聞の珍事だぞ。過去には庶民の友人を招いたこともあったから、千紗はいい。しかし、その他の者を招いたことなど前例がない。いくら年上とはいえ、身分を考えればお前の方が上なんだぞ。本来ならば貴族であるお前が敬語を使われる立場であり、庶民に敬語を遣うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけ」
「……はい」
「分かったのならばよい。しかし、部活部活と浮かれて勉強をサボるような真似はならぬ。鈴南、由梨亜に家庭教師が来る時間だ。先生をお迎えしろ」
「はい。畏まりました。お嬢様、お勉強のご用意を」
「分かっているわよ。鈴南」
「それでは由梨亜、先に行け。私は鈴南に話があるからな」
「はい、分かりました。それでは失礼します。お父様」
由梨亜が出て行くと、耀太は声を潜めて言った。
「鈴南」
「何でしょうか」
「由梨亜は、何故あのようになってしまったのだろう」
鈴南は額に皺を寄せ、難しい顔で黙ったかと思うと、小さな声で慎重に言った。
「お部屋にいる時や学校にいる時は、人権侵害に触れる為、監視は不可能です。ですが、その他の時……本条家の者が付き添わずに外出する時は、身の危険を回避する為という名目を持って、なるべく

目を離さぬように、召し使い達に手を回しておきます」
「さすが鈴南。そういう所もしっかりしている」
「お褒めの言葉、ありがとうございます。それでは、先生を迎えてきます」
鈴南が出て行くと、耀太は半眼を伏せた。
（鈴南に任せたから、大丈夫だと思うがな……）
「こちらも、手を回しておくか。用心はいくつ重ねても足りる物でもないし。私の可愛い由梨亜の為なら、害になる物全てを取り除いておかねば……」
由梨亜は耀太の言葉を扉の陰で聞いていたが、それを聞き遂げると足音もなく立ち去った。

千紗は、由梨亜が帰った後、すぐに日記帳の中身を見た。
「へぇ～。由梨亜のお父さん、シャリート国から帰ってきたんだ～。そういえば、なんか嬉しそうだったよなぁ、あの日。えっ……ゆ、由梨亜……」
千紗は、思わずその文字を絶句して読み返した。
そこには、
『この日記帳を手にしてから、出掛けた時に視線を感じるようになったの。不思議よね。しかも、大勢の人がいても、沢山の車が走っててもそこだけが視えないかのように、存在しないように、人一人が余裕を持って立てるくらいの幅の空間が空いているの。その一瞬後には人や車が通ってその空間は埋まるんだけど……ま、気にし過ぎなのかもね。やっぱりこれ、どうしても先輩の悪戯としか思えないんだもの』
と書いてあった。
それに、千紗は思わず吹き出していた。
「全く、由梨亜ったら……ま、ほんとに先輩が監視してたら怖いけ

ど。でも……そんなのあり得ないし。やっぱ、気にし過ぎなんだよ、由梨亜」
そう呟きながらも、親友である由梨亜を心配しているのだろうか、千紗の顔にはあまり笑顔がなかった。

翌日、由梨亜は千紗の家に、勉強道具を抱えて行った。
一緒に宿題を片付ける為だ。
その途中、昨日のことを思い出した由梨亜は、申し訳なさそうに言った。
「千紗、ごめんなさい。お父様から、千紗以外は駄目って……」
「何で！　あたしがいいなら、他の人もいいはずじゃあ……」
「それが、大勢の庶民を屋敷に招待するのは、前代未聞の珍事。過去には、庶民の友人を招いたこともあったから千紗はいいけど、他の人を招いたなんてことはない。いくら年上とはいえ、身分を考えれば、私の方が上。本来ならば、貴族である私が敬語を使われる立場であって、庶民に敬語を使うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけって……お父様が」
「そっか。じゃあ、しょうがないよね……。でもさぁ、由梨亜。何でこうなのかなぁ。今のこの世の中、身分制度でガチガチに凝り固められて、階級重視じゃん。何も由梨亜を批判するわけでもないけどさ、お嬢様は幼稚園からずっと、あたし達庶民が通えないようなお嬢様学校に通ってるでしょ？　ホテルも、あたし達は一流な物なんていくらお金を出しても泊まれないし、二流の物はお金持ちの倍取られるし。貴族の人に遠慮して、庶民を近くに寄せないようにしているのかも知れないけど……でも、ここまで差が激しいと嫌になるよ」
「でも、昔から……そう、約四千年近く前の昔から、この制度は続いているのよ。その頃はもっと格差は大きかったけれど、今とはあ

んまり変わらないわね」
由梨亜はそう、溜息をつきながら言ったが、千紗の可笑しな様子に、首を傾げた。
「……」
「千紗？」
「……」
「ちょっと、聞いてるの？　千紗」
「……」
「ねえ、千紗。千紗ってば！」
「あのさぁ。由梨亜」
由梨亜が煩かったのか、それとも珍しく考え込んでいたのか、千紗はようやく口を開いた。
「あたし達って、今日、十三歳の誕生日だよね？」
「あっ……」
ようやくその事実に気づいた由梨亜は、今までしていた会話が、あまりにも誕生日にそぐわないことだということに、やっと気付いた。
そして千紗は、さっきあんなに長々と現代の格差について熱く語っていたのに気付いて、黙り込んでしまったのだった。

その帰り、千紗は由梨亜に、由梨亜は千紗に、それぞれ青系、赤系で作ったビーズのネックレス、ブレスレットを渡した。
どちらも素晴らしい出来で、手作りの汚さはなく、手作りの良さのみがあった。
そして思わず由梨亜は、
「うわあ。千紗、ありがとう！　丁度着るドレスが青いんだよね」
と言って感激したのだった。
「何言ってんの！　お礼を言うのはあたしの方だよ！　赤はあたし

の色って言われるし……本当にありがとう！」
　お互いに感激しながらも、別れ道に来てしまった。
「それじゃあ、明後日の私の誕生日パーティーで！」
「うん！　また明後日！」

「はい、どうぞ。さっさと食べちゃいなさい」
「いっただっきま～す！　うわ！　やっぱりお母さんのご飯美味しい！」
「全くもぅ。千紗ってばお世辞が上手！　……そういえば、今はもう天国にいるお父さんも、私が作った料理をいつも美味しいって食べてくれたのよね……」
　千紗の父は、千紗が五年生の時……つまり、二年前に交通事故で逝ってしまったのだった。
　しんみりしてしまった空気を払うように、千紗はことさら明るい声で、母親に話しかけた。
「お母さん、よく覚えてるよね。あたしだったら、そんな細かいことまで覚えてらんないよ。……そう言えば、明後日に由梨亜の誕生日パーティーがあるのね。それで呼ばれているんだけど、何着ればいいかな？　あたし、そんな余所行きの物、大して持ってないんだけど……」
「う～ん……そうねぇ、私が前着ていた、薄い赤紫色のドレスは？　それに千紗。『そんな細かいこと』とは聞き捨てならないわ。貴女、初恋もまだなんだからそんなこと言えるのよ」
　目を不気味にキラッと光らせながら言う母親に、千紗は苦笑しながら言った。
「こっちこそ、『初恋もまだ』とは聞き捨てならないよ。初恋ぐらい経験済み！　そんで、ドレスって、あのドレスのこと？　濃い目の赤紫色で蔓草模様が刺繍されてるの。あれちょっと大人びてるよ

ねぇ～」
「――それはそうと、そう言えば千紗、夏休みの宿題は？」
いきなりの母親の話題転換に、千紗は反応が遅れてしまった。
「……え、えっとぉ～。それはぁ……そのぉ……」
「って、いうことは、まだ、全然手を付けてないわね？」
「ぜ、全然じゃあないんだけどぉ……さっきも由梨亜とちょっとやったしぃ……」
「千紗！　下らないこと喋ってないで早く片付けなさい！　さもないと……」
「……さもないと？」
千紗は上目遣いに、そっと母の様子を窺った。
「宿題持って学校に行かせるわよ！　丁度先生がいて、片付けるのがさぞ楽でしょうねぇ？」
その、あまりにも恐ろしい言葉とにっこり笑った笑顔……。
思わず千紗は身震いしてしまった。
「はい、はい！　すぐ片付けます！」
そう言うと、千紗は急いでご飯を掻っ込み、部屋へと走っていった。
それを聞いていた母は、思わずクスッと笑ってしまった。
「あの子は私に遺された、たった一人の娘……。大事に育てなくっちゃね……」
つい、そんなことを呟いていた母は、部屋から聞こえる声に、思わず破顔してした。
「あっれ～。夏休みの宿題どこ置いたっけ～？　えーっ。ない～！」
その声が聞こえてくると、千紗の母親は、リビングのテーブルの片隅にその宿題があるのを発見し、ぷっと吹き出して言った。
「千紗～！　宿題ここにあるわよ～！」
「えーーっ！　うっそ～！」
ドタバタと、凄い勢いで部屋から出て来た千紗に、母は思わず笑ってしまった。

「全くもう、千紗ったら」
母親はくすくすと笑うと、千紗に宿題を手渡した。

第二章「誕生日パーティー」―1（前書き）

今回、途中でかなり差別的な発言や、敬意が全くないような発言が出て来ます。そういう物が苦手な方は、ご注意下さい。

第二章「誕生日パーティー」―1

八月十八日月曜日の午後三時、由梨亜の誕生日パーティーが、本条家本宅にて行われた。

だが、由梨亜はまだ子供なので午後三時から午後八時までの五時間だけだった。

由梨亜の家の門の前に行くと、本条家に仕えている、黒い、揃いのスーツを着た男性達と、薄手の白の長袖、踝丈の清楚な感じのするドレスを着て、髪をこれまた白いレースのリボンで高めの位置に一つ結びに結んだ女性達が、それぞれの招待状を一枚一枚確認していた。

千紗は、緊張しながら、招待状を渡した。

それは、千紗が今まで見たことがない立派な模様と本条家の印章が綺麗に印刷してあり、門にいた召し使い達は、実に丁寧な態度で、招待状と、目の前に置いてある端末機で招待状を出した人の名前が載っているリストを確認し（これは偽の招待状を使って潜り込まれないようにする為と、誰が来てくれたのかを確認する為である）、中の大広間まで案内してくれた。

千紗は、由梨亜の家には何度も行ったことはあったが、そのほとんどが由梨亜の部屋がある棟にしか入ったことがなく、おまけにこの大広間がある棟は由梨亜の部屋があるのとは別の離れている棟にあったのでこの大広間に入ったのは初めてだった。

そして、この大広間はとても広く、千紗の家が二つ入ってもまだまだ余裕がありそうだ。

天井はとても高く、三階までの吹き抜けになっており、大きな、本物のシャンデリアがいくつも輝いている。

庭から見て一階部分の左半分はダンスフロアに、右半分は立食ができたり座って食べたりできるようになっている。
そして一階から三階に掛けて、吹き抜けになっている。
庭と二階、三階はテーブルやベンチがあり、食べたり話したりができるようになっていた。
千紗は感嘆すると同時に、周りの様子を観察した。
やはり、千紗の年頃と同じような子供はいるが、少女達は千紗の何倍も立派で真新しいドレスを着て、しかも全員一箇所に集まり、談笑をしながら千紗や少年達を……特に、自分達よりもみすぼらしい格好をした千紗の方を、無遠慮にジロジロと眺めていた。
少年達は何人かずつ固まり、談笑しながら少女達の集団をチラチラ見ていて、千紗のことは虫けらほどにも気を留めていなかった。
まあ、その反応は、千紗にとっては気楽なことだったが。
大人達は男同士、女同士で固まり、談笑していたり、その固まりから抜け、ダンスの申し込みをしていたりしていた。
しかし、千紗がいくら見渡しても、人混みの中に目を凝らしても、由梨亜の姿はない。
時間は、もう三時三十分になろうとしている。
（こういう風に時間が過ぎてから主役登場なのが、上流階級風なのかな……）
と、千紗は思いながら、到って大人しく、静かに待っていた。

「由梨亜お嬢様、準備はお済みですか？」
鈴南（すずな）の声が、由梨亜の部屋の前で聞こえる。
由梨亜は、ドレスの着付けを
「たまにはいいじゃないのよ。ほっといて。それに、こういうことも今のうちに経験しておいた方が将来困らないと思うし。だから、ねっ、自分でやるから」

と、理屈になっているのかなっていないのかよく分からない理屈（我儘とも言う）をこね、言い張り、その勢いに反論できずに固まってしまった召し使い達を尻目に、部屋にドレスと靴を持ち込んでしまった挙句、内側から施錠してしまったのだった。
「由梨亜様、髪を結わなくてはなりませんから、お早く……」
「うるさいわねぇ、鈴南。まだ三時じゃないの。終わったから、扉の前を退いて頂戴」
「はい」
鈴南はそう言って下がり、それを部屋の中から確認した由梨亜は、扉を開け放した。
そこには、この前本条紳士淑女高級店で買った、裾が南国の海の海底が一段と深くなった所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーションの長袖・膝下丈の絹地のドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメルの靴を身にまとい、そこに千紗のプレゼントした青系のビーズで作ったネックレス・ブレスレットを付けた由梨亜の姿があった。
ネックレス・ブレスレットは、グラデーションだけの無地のドレスを邪魔せず、すっきりと収まって、由梨亜の若さ、まだ幼いからの独特の美しさ、大人びた気品を矛盾せず、それどころか強調して放っていた。
鈴南は、その勢いに呑まれたかのように見えたが、由梨亜のつけているネックレス、ブレスレットに目を留めると
「それは……？」
と、問いかけてきた。
「千紗がプレゼントしてくれたの」
と、由梨亜は茶目っ気たっぷりに、悪戯っぽく答え、その答えに思わず絶句し、彫像のように固まってしまった鈴南を、その場に措いて立ち去り、本来ならそこで着付けをするはずの部屋へと向かった。
そして、魂がどこかに飛んでいったような鈴南は、二、三秒後慌

てその後を追った。
由梨亜がその部屋へ着いたのが三時五分だったが、髪をセットし、メイクを終えたのが三時四十五分だった。
鏡に映った由梨亜は、普段は少しフワフワと波打っている髪を真っ直ぐにし、毛先をクルクルと巻いて、それを首の少し上辺りで留め、その先を右肩の方へ垂らしていた。
その髪留めは、この前の買い物で買ってきた物だった。
顔は、睫毛にはマスカラを塗り、唇はほんのりと紅く染まり、目の上は薄い水色で彩られ、美しい美少女に……しかも、余所行きの格好をした大金持ちの家の令嬢となっていた。
いや、普通なら、この格好が普通なのだ。
由梨亜がお嬢様離れしていて、いつも庶民のような格好をしているだけなのだから。
「さあ、お嬢様」
と、促され、由梨亜は部屋を出て耀太（ようた）、瑠璃（るり）と合流し、大広間へと向かった。

千紗は、大広間で由梨亜がくるのを待っていた。
そこへ、
「そこの貴女。ちょっといいかしら？」
と、いかにも上品な声が掛かった。
「何ですか？」
と、千紗が振り返って言うと、そこにはさっきこちらをジロジロと眺めていた少女達の集団があった。
「ちょっと、伺いたいことがありまして……お時間、宜しくて？」
「ええ、いいです」
「それでは、少し庭で……」
そう言うと、少女達は千紗をあまり目立たない庭の片隅へと連れ

て行った。
　そして、千紗を片隅に押しやり、少女達は腕を組んで一列の半円形になり、千紗が逃げられないように閉じ込めた。
「お前、私達のような上流階級ではないでしょう？」
　と、先程大広間で千紗に声を掛けてきた、一番年上の、少女達のリーダー格だと思われる少女が、氷のように冷ややかな声で千紗に話しかけた。
　その言葉には、先程のような、美しい、丁寧な響きはなく、侮蔑や軽蔑するような響きが含まれていた。
「ええ、そうよ」
　千紗は多勢に無勢な状況を、聞く人に全く思わせないような言い方で、身分の高い人にとっては不遜に、そして挑発するかのように、相手の顔を、顎を上げ、胸を張って答えた。
「あたしは、確かに貴女達に言わせればただの一般庶民、中流階級よ。親戚がそういうのになったっていう人も、一人もいないわ。でも……それでも、あたしと由梨亜は親友よ。だから何だって言うの？　何が悪いって言うの？　身分の違いが、何よ。一体何になるって言うの？　この日本州を治めておられる天皇陛下だって、貧しく、それ故に泥棒をしたりして、地に這いつくばり、その日を生き永らえている人だって、みんな同じ人間よ！　同じようにお母さんのお腹で育ち、母子共に痛い思いをして産まれて来た、人の子よ！　気が合えば、友達にだって……いいえ、親友にだってなれる！　だって、同じ人間よ。そんなの当たり前過ぎるほど当たり前なことじゃない！　だからあたしと由梨亜が親友になって、なにが悪いと言うのよ！　悪いと思うなら、その理由をあたしが納得するまで述べなさいっ！」
　千紗は色々と溜まっていたので、つい途中から声を荒げてしまった。
　だから、すさまじい気迫で少女達に啖呵を切った千紗は、その気迫に少女達が飲まれたことを感じ、形成が逆転したことを確信した。

しかし、それは早計に過ぎなかったようだ。
先程の少女達のリーダー格だと思われる少女が自分を取り戻して、睨みつけながら言い返してきたのだから。
「んまあ、なんて汚らわしいことを！　あんな野獣以下の下等生物と神にも等しい天皇陛下を同列に並べるだなんて！　天皇陛下とそのご家族ご一族は神よ。神の子よ！　そして降嫁なされた天皇陛下の姫君とそのご家族、そして私達何代も続く貴族……そう、大商人や上流階級と呼ばれる一族が人間。そういう者だけが人間と呼ばれるのに値するのよ。残念ながら地球連邦の総人口の半分にも満たないのだけれどね。そしてお前達、一般庶民、中流階級と呼ばれる、この地球上に最も多くいる生き物達は半人よ。私達人間と下等生物達との中間。ありがたく思いなさいな。下等生物とも、野獣とも言われても仕方のない生き物を、『半人』と呼んであげているんだから。そして、お前がさっき言った最下層……あの下等生物達は野獣や溝鼠、そして泥よ。生き物ですらないわ。人間がそういった『物』と親しむのは、言語道断。今からでも遅くはないわ。お前と由梨亜様を今後一切近づけやしないんだから！　さあ、地に這いつくばり額を擦りつけて、許しを、私達の慈悲を請いなさい！　そうすれば、私達は人間ですから、考えてあげなくもないわ。あら、それとも……」
と、その少女は含み笑いをし、軽蔑しきった口調で言い放った。
「『半人』ですから……言葉も通じませんの？　私達人間の上品な言葉は。ねえ、皆さん」
少女はそう言うと上品に笑い、周りの少女達もそれに同調し千紗のことをなじりまくった。
「ほ～らほら。早く謝らないの？」
「さあ、早く頭を下げなさい」
「いえいえ、土下座にすべきよ」
「そうそう。それでは、そのドレスを土で汚しなさい」
「そうね。それにそんな時代遅れのドレスなんて、もう既に汚れま

みれになっていますわ」
「それならば、もう少し汚れても、文句はいえませんわよねぇ？」
「いいえ、それだけでは何か物足りませんわ」
「そうね。それだけでは足りませんから、額と顔を泥で汚すことにしましょう。ねえ、皆さん？」
「そうよ。異存はありませんよね、この『半人』っ」
「いいえ、半人とは、ちょっと……いいえ、大分美化し過ぎではないかしら？」
「ええ、そうですわ。これは奴隷よ」
「それに、奴隷は人間ではないわね」
「私達に使役される為に生まれてきた『物』よ」
「人権もないわ」
「口答えも許されなかったわよね？」
「侮辱も、許されなかったはずよ」
「直接手を触れることも許されないわ」
「私達『人間』の顔をまともに見詰めるなんて、生き恥もいい所ね」
「お前の本当に従順な先祖と比べたら、その先祖が泣くわ」
「それに、天皇陛下とそのご一族のことを口にする時は、地に跪き、額を擦り付け一言『自分のような「物」が貴方様方の御名を口にすることをお許し下さいませ。どうかご慈悲を』と言わなければいけないのでは？」
「ああ、それと最上級の敬語を使わなければならなかったのではないかしら」
「それどころか、奴隷なんかは、滅多に声を出してはいけないはずよ」
「なら、この奴隷は、奴隷に認められている生存権違反を次々に犯しているわ」
「それなら、直ぐ様この奴隷を躾けなければね」
「感謝しなさい。公共機関に言い付けないで、私達の手でやるんだから」

「ええ。それと、後で本条家の方々や私達のお父様やお母様にも言い付けなければね」
「それでは話がまとまった所で、そこの『物』、さっさとおやりなさいな」
「お前には、拒否権などと言う権利は……それどころか、生存権に定められている、『生きる』という権利以外は何の権利も持たないのよ」
「さあ、さっさとやりなさい。私達、そんなに長時間待てませんわよ」
「あら、ひょっとして、もしかすると……」
「本当の本当に、上品な人間の言葉が、お前みたいな奴隷には、通じないのかしら？」
以上、ほとんどの少女達の、千紗に対する侮辱であった。
そのことに気分を良くしたのか、少女達は勝ち誇り、驕り高ぶったように笑う。
そんな中、少女達の満足そうな、こちらを蔑む顔に囲まれた千紗の頭のどこかがプツッと音を立てて切れた。
「はぁ？　あんた達、何言ってんの？　気は確かですか？」
千紗は到って穏やかに、それでいてどこかふざけているように聞こえる声で、言い放った。
千紗は、激情したり興奮したりした時は、先程のようにはっきりきっぱり言い放ち、見事に啖呵を切りまくるが、完全に切れてしまうと、ふざけたように、静かに、穏やかに、それでいて言葉の一言一句にすら、実に丹念に丹念に猛毒を仕込んだ毒針を地肌が見えなくなるぐらいにまでまぶし、それを伝えたいと思う人のみに、真冬の北極と南極を足して二で割らないぐらい冷たく、心を凍らせるように響く。
それでいて、関係ない人には全くそのようには聞こえない。
凄いの一言しか……出てこない。
「全く何を言ってるのかしらねぇこの人達は。ほんっとうに全く意

味が解らないわ～。あたしと由梨亜が、由梨亜の両親召し使い共々二年前に完全公認の親友だとも知らないでねぇ。あんたらって、そんな頭もない産まれたての小鳥かしら？　それともミジンコ？　ミカヅキモ？　アメーバ？　アオミドロ？　ゾウリムシ？　ヤコウチュウ？」

千紗は、小学校の理科で習った微生物の名前を次々に挙げていったが、少女達は眉を顰めた。

「な、何よそれ。この世に存在しない、ありもしない想像上の名前を挙げて欲しくないわ」

勇気を取り戻した少女のうちの、千紗と同い年の少女がそう言ったが、千紗は皮肉たっぷりにニコニコ笑いながら言った。

「あ～ら。何言ってるの？　この微生物の名前を知らない訳？　おっかしいわねぇ。あ～あ……あんた達は受験しなくてもいいし、そのまま黙っててもいい将来は保証されそうなんだけどねぇ……最低限、義務教育の中で習った内容は覚えていて欲しいわねぇ。それに、この微生物の種類を学ぶことは必修科目だったし……。ミカヅキモ、ゾウリムシ、ヤコウチュウ、アオミドロの名前を知らないのは、まぁ、馬鹿過ぎだからしょうがないとしても、よ？　ミジンコとアメーバの名前ぐらいなら、ちょっと賢い幼稚園児でも知っていそうだけどなぁ？　ああ、それとも今あたしが言ったように微生物程度の頭脳しか持ち合わせていない訳？　それとも、右から聞いたことが左へ抜けて行く竹輪耳？　三歩歩けば忘れる鶏？」

「この……！」

と、少女達が気色ばんで大声をあげようとした時、絶妙のタイミングで、その気を挫くように、後ろから声が掛かった。

「お嬢様方、どうかなされましたか？」

皆が振り返ると、そこには本条家の、それなりに高い地位で仕えているらしい、召し使いの中でも立派な服装をした男性が立っていた。

少女達は、千紗の、皇族と貴族を卑下する、あまりにも傍若無人

な態度を告げ口しようと思ったが、生憎相手の名前が分からない。
もし自分の家や、自分と同じ階級、または自分より格下の家で使えている召し使いで名前が分からなくても、
「そこの貴方」
などと、呼びかければいい。
だが、本条家は地球連邦の上流階級のなかではトップクラスである。
様々な分野で活躍し、辺境に当たる地球連邦なのにも拘らず、地球連邦初の他星に支店を出店したほどで、だからといってお金儲けにしか目がない悪徳商売人ではなく、そうやって稼いだお金を地震などの天変地異や自然災害があった所に全く惜しげもなく送り、世界中にいる貧しい人達の為に医療物資や食料、学業用品を送り、様々なことに寄付をしている。
極め付けが、何十代も続く大貴族である。
なので召し使いとはいえ、本条家に仕えている以上、ただ『貴方』と、軽々しく呼べないのだ。
そういう理由があり躊躇っていた少女の間をすり抜け、千紗はその人の下へと歩み寄った。
そして、千紗は何と、半ベソをかきながら、その人に訴えたのだった。
「坂本さん。あの人たちが、何だか分からないんですけど、何かあたしに身に覚えのないことを責められているんです……」
それを聞いた少女達は呆れ返ってしまった。
（あんなに私達を侮辱しておいて、その白々しさは一体何！）
と、全員が思った。
本気で呆れ返った。
しかし、そんなことは知らない坂本は、こう慰めた。
「千紗さん、大丈夫ですよ。貴女は分からないと思いますが、彼女達には、彼女達なりの誇りという物があるのですよ」
「そうなんでしょうか？」

それで少女達はようやく千紗の名前を知ったが、それどころではなかった。
何故かと言えば、千紗はうっすらと涙ぐんでいるだけではなく、声まで涙声になってしまっているのだ。
少女達は、あまりのことに、今度は膝がヘナヘナと崩れ、土にのめり込みそうになるのを堪えなくてはならなかった。
さすがにそれだけは、貴族の誇りに賭けてもできない。
そしてこんな腹芸は、今の自分にはできそうにない、と本気で思った。
また、何故一般庶民がこんな技を持っているのか、真剣に考え込んでしまった。
身分の上下に拘らず、商売をやっていたり政界に身を置いていたりする人間は、思ってもいないことや、物事を有利に運ぶ為の駆け引きを口にする……つまり、腹芸が重要となる。
なので、ある程度は子供のうちからできるし、やらなければならないことだが、今の千紗のように堂々と口論し、啖呵を切り、相手を窮地に追い込みながらもその仕上げとして、召し使いとはいえ、見知っているとはいえ、事情を知らない相手に涙ながらに縋りつき、それを覚られずに丸ごと信じさせるなんてことは、まだ幼い彼女らには到底無理な話である。
それどころか、そんなことができる大人もあまりいない。
しかし、二度目になるが、本当に何も知らない坂本は、少女達を追い立てた。
「そうです。さあ皆さん。由梨亜様が来られますよ」
「はい。分かりましたわ」
そういうと、何とか持ち直した少女達はツンとすまして、千紗を睨みつけながら、部屋に戻っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7986x/

時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

2011年10月25日03時07分発行